

第4学年 国語科の実践

1 単元名 場面をくらべて読もう 「一つの花」(今西 祐行作)

2 単元目標

○物語の構造や人物の心情について主体的に読み取り、主題に迫りながら自分の考えを深めることができる。
(関心)

○場面の情景や登場人物の様子や心情を叙述に即して想像しながら読むことができる。(読むこと)

3 ひびき合う子どもたちをめざすための指導の工夫

研究課題「切実な問題意識を持ち、友だちと関わり合いながら学習する子どもの育成」
手だて・・・子どもの「切実な問題」を見とった授業づくり

単元と指導

①単元について

「一つの花」は、戦争という大きな流れの中で生きた人々の悲しみや愛情を描いた物語である。戦争が激しくなり食べ物も乏しく、体の弱いお父さんさえも戦地へ向かわなければならなくなった戦争末期と、戦争から十年がたち、貧しいながらもコスモスの花に囲まれた小屋で、母と娘が幸せに暮らしている二つの場面で構成されている。恐ろしい戦争の力を持ってしても、親が子を思う心や美しいものを尊ぶ人間らしい心を奪うことはできない。戦争への嫌悪や平和を願うと共に、どんな状況下であっても変わらない家族の愛情(子を思う親の思い)や悲しみを乗り越えて生き続ける人間の強さが三人称客観視点で語られている。そして、戦争の中にあっても強い愛やつながりをもって精一杯生きようとする家族の姿が主題として描かれている。題名の「一つの花」はお父さんの願いであり、「美しいもの・愛・幸せ・喜び・命・平和」等の象徴である。本教材では、戦争の悲惨さを訴える事よりもその中で懸命に生きた人々の思いや願いを考えることに焦点をあてたい。また、家族の大切さ、今ある自分についても考え、生きていることや平和に過ごしていることへの喜びを少しでも子ども達に感じさせたい。

②他教科との連携について

「一つの花」の背景は戦争時代である。戦争の中で生きた人々の思いや願いを深く読み取っていくためには、時代背景を表す言葉の意味を理解し、そのイメージを自分なりに持っている必要があると考えた。戦争中の生活の様子を、戦争を体験した人の話や資料から感じ取り、戦争当時のイメージを持って、深く読む時の助けになるようにしたい。また、主題に迫るためにはゆみ子への父親の思いが重要となってくる。しかし、小学4年生の子ども達にとって親の視点に立って子どもへの思いを考えるのは難しい。そこで、道徳の時間に「お母さんのせいきゅう書」を読み、親の子に対する思いを考える学習を行う。また、親から子どもへ宛てた手紙を準備し、自分の親が愛情を持って育ててくれていることを実感させ、父親の心情を読み取る時の助けとなるようにする。

③子どもの見とりと学習過程について

「一つの花」を読むにあたって、本学級の子供達はどこにこだわりを持って読んでいきたいと考えているのかをはっきりさせていくことから始める。そこで、初発の感想の後にゆみ子、お母さん、お父さんの行動や言葉で不思議に思った所を出し合っていく。クラスみんながだれに対して不思議感を抱いているのかを目に分かる形で掲示して共通理解を図る。そこから、切実な問題へとつなげていきたい。おそらく、子ども達は、悲しげな言葉の後にめっちゃくちゃにゆみ子を高い高いする行動や別れのシーンで何も言わずに行ってしまった父の描写に「何で？ どうして？」といった疑問を持つであろう。ここで、「父親は何を考えていたのだろう」「どんな思いだったのだろう」といったお父さんの心情を知りたいという知的好奇心を持たせたい。また、「この物語は、どんな人物が登場して、どのように関係し合い、どんな事件(出来事)が生じるのか」といった大方の構造を抑える。その際、登場人物の心情が大きく変化するクライマックスを取り上げ、クライマックスはどこかについて考えさせていく。子ども達の多くは今まで笑った姿を見せなかったお父さんが笑った変化の分かりやすい「お父さんは、それを見てにつこり笑うと・・・」の場面を選ぶと考える。この場面は子ども達ははじめに不思議に思っていた場面と同じであることから、「お父さんの気持ちはどのように変化したのだろう。」と切実感に繋がったところで本単元の中心的な学習課題としたい。本課題の、お父さんの気持ちの変化を知るためには、お父さんのそこまでの行動や言葉、周りの様子を叙述をもとにしっかり読み取っていくことが必要となる。そこで、父親の視点に立って読むことができるように、「まるで～のように。」の比喩表現や「～のでしょうか。」「～のです。」「～のでした。」などの文末表現を抑え、意識して読み進めることが出来るようにしていく。また、対比表現の読み取り方も一緒に抑え、比べながら読むことで登場人物の置かれている状況や心情の変化をより豊かに想像して読み取れるようにしていきたい。

最後に今まで学習してきたことから、お父さんのことを覚えていないゆみ子へ手紙を書くことにする。そこでは、ゆみ子へ対するお父さんの思いを自分の言葉で書かせる。その活動を通して、自分の生活を振り返り、家族の大切さや今ある生活がとても恵まれていることに気付かせたい。

④本時のねらいとひびき合いについて

本時では、にっこり笑って、何も言わずに汽車に乗って行ってしまったお父さんの気持ちを考え、話し合う。その際、自分の考えをしっかりと持って話し合いができるように、自分の読みを持つ時間を重視する。そして、その考えをお互いに出し合うことで、にっこり笑って、何も言わずに戦争へ行ってしまったお父さんの心情へ迫っていけるようにしたい。単に想像だけの話し合いにならないように、叙述に即して具体的に話し合いが進むように指導していきたい。

自分の考えを伝え、友だちの考えを聞き入れたり、新たな気づきが持てたりする姿を「ひびき合う姿」としたい。

4 単元指導計画（全12時間）

国語への関心・意欲・態度	読むこと
物語の構造や人物の心情について主体的に読み取り、主題に迫りながら自分の考えを深めることができる。	場面の情景や登場人物の様子や心情を叙述に即して想像しながら読むことができる。

次	時	ねらいと学習活動	主な支援と・留意点【評価】
一	1 2 3 4	○教材に興味を持ち、学習の見通しを持つ。 お話をていねいに読んで学習を進めよう ・教師による範読を聞き、感想を書く。 ・新出漢字や難語句の確認。 ・音読練習。 ・文章表現について、その言葉の意味を知る。 (比喩表現、対比、反復、文末表現等)	・前時までに、戦争時代のお話をいくつか読み聞かせをし、戦争について意識を持たせておく。 ・音読については、毎時間、全文を通読できるように時間を確保する。 ・難語句は、朝の時間などに行っておく。発表の際には辞典通りではなく、子ども達自身の言葉で表現する。 【関心・意欲・態度】
二	5 6	○物語の構造を把握する。 深く読めるように、お話の流れを考えよう ・時・場・人物を明らかにする。 ・発端の場面を見つける。 ・クライマックスの場面を見つける。 ・作品全体の構造を理解する。	・発端とは、クライマックスとは何かをしっかりとおさえておく。 ・次の読み取りに繋げて行けるように、根拠を持って話し合ができるようにする。 【関心・意欲・態度】【読む】
三	7 8 9 10	○登場人物の心情の変容を心内語や情景描写から読み取る。 お父さんの気持ちはどのように変化したのだろう ・ゆみ子をめちゃくちゃに高い高いするお父さんのゆみ子に対する思いを読み取る。 ・駅へ向かう家族の様子を読み取る。 ・コスモスに込められたお父さんの思いを読み取る。(クライマックス) ・汽車に乗って戦争に行くお父さんの心情を読み取る。(本時)	・戦争当時と現代の対比、見送りの場面での対比の表現に着目することで人物の心情や様子をつかませる。 ・「まるで、～のように」という比喩表現から、さまざまな想像をして自分の言葉で表現する。 【関心・意欲・態度】【読む】
四	11 12	○作品に対する自分の考えを深める。 ゆみ子へ手紙を書こう ・お父さんがゆみ子に対して抱いていた思いを伝える手紙を書く。 ・自分の生活を振り返り、物が溢れる社会で暮らすことや家族の大切さやについて考える。	・学習してきたことを想起して、自分の言葉で書く。 【関心・意欲・態度】

6 本時について

(1) 本時目標

「一つだけの花、大事にするんだよう。」と言ったお父さんの思いを読み取り、戦争へ行かなければならないお父さんの気持ちを考える。

(2) 本時展開

学習活動	指導上の支援・留意点・評価
1、前時までの学習を振り返る。 2、学習課題について確認する。 にっこり笑って、何も言わずに汽車に乗って行ってしまったお父さんの気持ちを考えよう 3、「一つの花」を音読する。 4、課題に対して自分の考えを交流する。 【にっこり笑ったのは・・・】 ・ゆみ子に花をあげると喜んでくれたので嬉しかった。 ・食べ物でない「コスモスの花」でも喜んでいるゆみ子の姿に安心した。 ・心配そうな顔を見せたらゆみ子がまた泣いてしまうと思ったから。 ・最後くらい笑って別れたかったから。 【何も言わずに行ったのは・・・】 ・最後にゆみ子の笑った顔を見ながら別れたかったから。 ・せっかく笑ったゆみ子が言葉をかけると、また泣き出してしまうかもしれないから。 ・ゆみ子が笑っている姿を見て安心したから。 ・ゆみ子の将来に「この子はきっと大丈夫。立派な大人に成長してくれるだろう。」という思いが持てたから。 5、学習の振り返りをする。 6、次時の学習内容を知らせる。	・前時までの学習を想起しやすくするために掲示をしておく。 ・全体で音読させるが、自分の読み方で音読させるようにする。 ・自分の考えを事前にまとめさせておく。 ・グループで交流し、自分の考えを表現させる。聞き手は、反応したり感想を言ったりできるようにする。グループの友達の考えで、なるほどと思った内容は自分の考えに付け足していくようにする。 ・全体で交流する。 ・話し易い雰囲気を作るため座席を工夫する。 ◇自分の考えを伝えようとしている。友達との共通点や相違点に気付くことができる。【話す・聞く】 ◇前時までに読み取ってきたお父さんのゆみ子へ対する思いを関わらせながら理由を考えている。【読む】 ・はじめに出てきた「一つだけ」とコスモスの花を渡すときの「一つだけ」を対比させ、お父さんの気持ちの変化を読み取れるようにする。 ・お父さんの気持ちの変化を、本時の学習課題に繋げて考えられるようにする。 ・課題に対する自分の考えをまとめさせる。振り返りカードに記入する。

(3) 本時の具体的な評価

	◎十分に満足できる	○おおむね満足できる	努力を要する場合の手立て
読む	「一つだけの花、大事にするんだよう。」と言ったお父さんの思いを、不安を漏らすお父さんの言葉と対比しながら読み取り、戦争へ行かなければならないお父さんの気持ちを考えることができる。	「一つだけの花、大事にするんだよう。」と言ったお父さんの思いを読み取り、戦争へ行かなければならないお父さんの気持ちを考える。	交流で出された意見を板書から選んで、戦争へ行かなければならないお父さんの気持ちをまとめることができる。

6 実践を終えて

<子どもと作った単元の流れ>

単元に入る前に、子どもたちの実態を把握するため、アンケートを行った。

物語を読むことについて、話し合い活動について、戦争についての3つの観点で質問を行った。

- 国語アンケート
- 一 本を読むのは好きですか。
 - 二 友達の前で自分の考えを発表するのは好きですか。
 - 三 友達の意見を聞くのは好きですか。
 - 四 戦争を知っていますか。
 - 五 戦争中の話を実際に聞いたことがありますか。
- はいと答えた人は誰から聞きましたか。

「一つの花」との出会いの前に、前時に行ったアンケートの結果から戦争について、知らないと答えた子やあまり知らない、詳しくは知らないといったような答えが多かったことから、戦争について興味を持つことができるように、戦争に関する内容の本を読み聞かせしたり、写真パネルを掲示したりした。

「一つの花」を全文読み初発の感想を書く。

①この物語を読んでゆみ子、お父さん、お母さんの行動や会話で心に強く残ったところ。

- お母さんの口癖「一つだけ」、ゆみ子の初めて覚えたことば「一つだけちょうだい」について。
 - お父さんとの別れの場面について。
- など。

父親は何をを考えていたのだろう

どんな思いだったのだろう

ゆみ子の気持ちが大きく変わっているよ

お父さんの気持ちが大きく変わっていると

※クライマックスが一つに決まらず、じっくり読んでいかないと分からないということになった。

ゆみ子をめちゃくちゃに高い高いするお父さんのゆみ子に対する思いを読み取る。

駅へ向かう家族の様子を読み取る。

コスモスに込められたお父さんの思いを読み取る。

汽車に乗って戦争に行くお父さんの心情を読み取る。〈本時〉

※親の視点に立って子どもへの思いが考えられるように、親から子どもへ宛てた手紙を準備し、自分の親が愛情を持って育ててくれていることを実感させ、父親の心情を読み取る時の助けとなるようにした。

劇でゆみ子に対するお父さんの思いを伝えたい

作品に対する自分の考えを深める

劇「一つの花」をやろう

②この物語を読んで、感じたこと・思ったこと

みんなで考えたり、話し合ったりしてみたいこと。

- ゆみ子をめちゃくちゃに高い高いするのが不思議。
 - お父さんはなんでコスモスをあげたんだろう。
 - お父さんは、どうして何も言わずに、汽車に乗って行ってしまったんだろう。
 - なんで、ゆみ子のにぎっている、一つの花を見つめながら行ってしまったんだろう。
- など。

※父への疑問が多く見られた。

お父さんの気持ち・何を考えていたのだろう

お父さんの気持ちを
読み取るために

大方の構造を抑える・クライマックス探し

学習課題

お父さんの気持ちはどのように変化したのだろう

<本時の課題について>

本時の課題は「にっこり笑って、何も言わずに汽車に乗って行ってしまったお父さんの気持ちを考えよう」であった。最初の感想でも多くの子どもたちがこの場面のお父さんの行動に疑問を持っており、この一文がクライマックスなのではないかと考えている子もいた。そのため、最後の別れのシーンでにっこり笑い、さらに何も言わずに行ってしまったお父さんについて「知りたい」という思いは大きかった。しかし、話し合いの途中で、「不安を漏らした時に言った『一つだけ』と、最後にゆみ子に言った『一つだけ』は同じなのか？」と、お父さんの言った『一つだけ』に絞った質問をしてしまった為、子どもたちの考えたいと思っていた課題からそれてしまった。教師の発問により、子どもたちの話し合いたいと思っていた視点をすり替えてしまったことになり、子どもたちが考えていた課題から少しずれてしまった。

本時で『一つだけ』の対比読みをした後、子どもたちから「まだ、お父さん気持ちが分からない。」「分かったような、分からないような・・・。」などの声が聞こえた。そこでもう一度「にっこり笑って、何も言わずに汽車に乗って行ってしまったお父さんの気持ちを考えよう」について話し合った。すると、お父さんの最後に言った言葉や、最後に渡した一つの花に着目してお父さんの気持ちを読み取っている子、前の場面でのお父さんの様子と対比させながら読み取っている子の姿が見られた。「何も言わずに、にっこり笑って行ってしまった。」お父さんの不思議さをどうにかして知ろうとする姿が見られことは、切実な問題として取り組むことができたのではないかと感じる。

<成果と課題>

本教材の背景は戦争時代であり、4年生の子どもたちがその時代を想像し物語を読み進めていくのはとても難しいことであったが、戦争を体験した人の話を聞いたり、実際に跡地に足を運んだり、写真パネルなどの資料を見たりさせたことで、教材文を読みたいという興味へと繋がったようだった。また、子どもたちは、本単元の学習を通して、文章をじっくり読み、自分の考えを持って話し合い、課題を解決していく活動を楽しむことができた。自分たちの疑問から課題を作り、その課題をみんなで話し合って一つ一つ解決してきたことで、「もっと話し合いたい。」「みんなの考えも聞きたい。」といった意欲に繋がったのだと思う。

時代背景や登場人物の心情を読み取る際は、「まるで～のように。」の比喩表現や、「～のでしょうか。」「～のです。」「～でした。」などの文末表現、比べながら読む対比表現をしっかり抑えていったことで、文章中の言葉を根拠として読み取った考えを発表することができる子が増えた。

本単元でのひびき合いは、自分の考えを伝え、友だちの考えを聞き入れたり、新たな気づきを持てたりする姿を「ひびき合う姿」とした。そこで、一人一人が自分の考えを持つ・グループの友だちに伝える・学級の全体に伝えるというような段階を踏みながらひびき合いを広げてきた。自分の考えがしっかり持てるように、挿絵を入れたワークシートを使い、自分の考えを持つ時間を十分に確保した。グループでの話し合いでは、どの子もグループの友だちに自分の考えを伝えたり、疑問に思うことを質問したりする姿がみられた。自分の考えをしっかり持つことができていたことで、「友だちはどのように考えているのだろう。」「なるほど、そういう考えもあるな。」「いや、それは違うと思う。」など、聞き方にも変化が見られた。このように、聞くことで疑問が生まれたり、新たな気づきが生まれたりする姿が多く見られた。

しかし、友だちの意見を聞いて「なるほど、そういう考えもあるな。」といった気づきがあったとしても、自分のこだわりを持った考えだけに、受け入れることができないでいる子もいた。友だちの考えを受け入れながら、より自分の考えを深めたり見直したりできるような学習をもっと大切にすることが必要であった。また、お互いの考えが見えるような形を工夫して板書することで、子どもたち同士の思いがもっとひびき合えたのではないかなと思う。